

## 移動の文学とディアスポラ

### —温又柔研究—

The literature of movement and diaspora—About Wen Yuju—

川野 祐理子

Yuriko Kawano

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 言語文化学専攻 修士課程

キーワード：言語，文化，他者

Key words : Language, Culture, Another person

#### 1. 研究目的

20世紀の後半になって、人々の国を越える動きが飛躍的に増加した。これに伴い、文学の世界でも国を越えることが登場人物に多大なる影響をもたらしたという作品が多く書かれてきた。そういった視点から言えば、日本においては「在日」と呼ばれる人々の作品に思い至るだろう。こういった作品群は特に第二次世界大戦という戦争の記憶と相まって、「在日文学」、「戦争文学」というジャンル名で有標化して考察される傾向にある。戦争を原因としない移住者が増え続ける現代では、戦争要素のない越境文学も多く書かれているが、この分野においてはまだ十分に考察がなされていないのが現状である。また越境による変化を内面化させた人物が主人公となる作品群の歴史と研究も、短く浅い。

今年度及び修士論文では、温又柔作品のなかでも、芥川賞候補となった『真ん中の子どもたち』を扱う。温の作品群の主人公は台湾をルーツに持つ人物のため、まず台湾の歴史を押さえたうえで『真ん中の子どもたち』の考察に取り組む必要がある。

本研究は、温又柔『真ん中の子どもたち』を通して、現代社会の言語・規範・差別意識のありようを考察するものである。文化史や言語史に関する資料を主に用い、民族史やコミュニケーションに関する文献等も参照する。この方法によって、現代における言語・国籍・成長環境から他人に想起させる認識を明らかにし、本作品の意義の考察へと接続させていこうとするものである。

#### 2. 研究実施内容

『真ん中の子どもたち』は、主人公の少女が中国へ語学留学した際の出来事が主題である。読者の記憶に残るのは、語学学校で主人公が教師に注意される場面で使われる、「正しい中国語」「普通語」「わるい癖」「南方訛り」といった言葉だろう。他にも自分は何人なのかといった主人公の悩みも記憶に残りやすい。ゆえに、本作品の内容を考察する前に「台湾」という土地に住む人々と、その歴史について学ばなければならない。

台湾の歴史を人の動きに則して大まかに追うと、まず先史時代から住む先住民族がおり、明朝の頃には当時の海賊との関係から漢人が点々と定住するようになり、続いてオランダ人が貿易拠点として現在の台南の半島を占領した。この時初めて先住民に文字がもたらされた。オランダ人が農耕に従事する漢人を募集したことで、台湾の漢人人口は大量に増加し、そのほとんどは福建・広東省からだった。その後1662年に鄭成功によってオランダ人は駆逐され、1683年に鄭氏は清朝に降伏し、清朝の思惑から外れて漢人はどんどん先住民の地を侵犯していった。その後は我々が歴史で習う通り、日本統治時代に皇民化政策が行われ、日本の敗戦によって中国へ返還（光復）された。しかし日本を身体化させられた台湾の人々は、国民党と国民党と共に台湾に移り住んだ人々（外省人）から「奴隷化」した者として弾圧・搾取の対象となり、終には二・二八事件が起こった。その後も現在の台湾の姿となるまで、白色テロなど多くの厳しい出来事が起こったが、端的にはこれが台湾という地に刻み付けられた歴史である。

このように台湾という地の歴史を辿ると、台湾人とは、台湾語とは一体何を指すのか、注意深くある必要に気づかされる。また中国で生まれ育った人が台湾に向き合ったとき、そこには複雑な歴史によって生まれた上下意識があるが、その意識も同時代的に生まれたものではなく周囲の大人から与えられ、それを素直に受け入れただけの現代の若者のような場合もある。また中華人民共和国内自体にも様々な民族の歴史と経済に端を發した上下関係、複雑な相互意識があることを忘れてはならない。

『真ん中の子どもたち』は旅立ちの日の前夜から始まり、それはもちろん旅立ちによって少女が大きな変化を遂げることを示唆している。中国に到着してから少しずつ少女の記憶が回想として挟まれ、それによって読者は少女が内面に抱える悩みとその感触を知っていく。日本人の父と台湾人の母のもとに生まれ、日本で育った少女は「自分とは違う人間」だと線を引かれる痛みを知っているが、その悩みを共有できる友人に出会ってこなかった。そのような少女の核に触れる友人との出会いと、彼らと共に挑む葛藤が本作品では描かれている。

もちろんその友人たちの出自や環境も様々なのだが、台湾にルーツ（の半分）を持つという点では一致しており、この偶然性と異国での生活という要素が相まって、この語学留学を極めて重要で特別なものにしていく。また台湾語と中国語（普通語）の関係も、少女が中国に語学留学して来なければ本人ははっきりと認識しなかった問題であったはずで、それはすなわち語学留学先に台湾を選ばなかったことから、少女の台湾と中国の関係に対する認識が薄かったことを表している。この少女の認識はレベルが異なるように思われるが、その実今日の我々の認識の延長線上にあるもので、自国の歴史認識の甘さやそこから来る無意識の暴力の存在を示唆する。

更に、ここまで「台湾語」の語を使ってきたが、普通語を教える教師が言う「台湾語」及び「南方訛り」とは一体何なのであろうか。先に見たように台湾の歴史、その集団の移動は複雑である。ゆえに台湾のなかで使われる言語も多岐に渡る。先住民族には個々の言語があり、戦後日本語に代わ

って使用することを強要された大陸の言語・国語（普通語）があり、幼少期後に台湾に移ってきた人々は第一言語である山東語や広東語を話す。こういったあらゆる言語のなかに、日本語も交じり、そのまま現地で普段使われる単語としても残っている。最近では親子三世代の第一言語・第二言語が異なることも多く、母語の継承がされないこともある。作品内には日本語を流暢に操り国語も話す少女の祖父が登場するが、彼の存在は重要で、彼の身体化された傷にも心を配らねばならない。このような内情のとき、台湾語とは一体何なのであろうか。この問いは少女の「自分は何人なのか」という問いに通底するものがあるが、現時点では答えがまだ出ていない。

### 3. まとめと今後の課題

文学において国や地域が中心となった作品を考えるとき、その土地に刻まれた記憶は必ず学ばなければならない。『真ん中の子どもたち』においては台湾であるが、その厚みと複雑性をこれまでほとんど理解していなかったと言わざるを得ない。更にそれは個人の問題ではなく、日本全体、また台湾にルーツを持たない人々すべての問題だと言えるのではないだろうか。本作品は台湾という国際社会で確固たる地位を与えられない小さな土地に目を向けさせる大きな力を持っており、それが作品の意義へと繋がっていくと現時点では考えている。

他者による暴力的な断絶と植民地支配は、現代でも形を変えて世界中に蔓延している。それらに連なる作品として、今後はまだ十分な学びが出来ていない植民地主義やディアスポラの考察を行う。これらの理解を深めることを前提に、『真ん中の子どもたち』の本文に丁寧寄り添いつつ、ルーツの異なる他人が主人公の少女に与える影響、少女が大人になって再び旅立つ意味、『真ん中の子どもたち』という作品の意義について考えていく。